

---

# 英詩註解——George CROLY の「瀕死のゲルマン人」

## *Paris in 1815, Second Part* (1821, 1830)より

笠原 順路

---

### 抄録

本稿は、18世紀から19世紀にかけて書かれた、ローマのカピトリニ美術館所蔵のいわゆる《瀕死の剣闘士》像（The Statue of the Dying Gladiator, 図1）に関する詩、または詩の一部に註釈を施し、その特質を考察するという大きな試みの一部をなすものである。<sup>\*</sup> ここに取り上げるのは、ジョージ・クロリー（George Croly, 1780-1860）が1821年に出版した『1815年のパリ——詩』（*Paris in 1815. A Poem.*）、および1830年出版の『1815年のパリ、第二部、ほか』（*Paris in 1815. With Other Poems, Second Part.*）に収録されている「瀕死のゲルマン人」（‘The Dying German’）の詩行である。本稿冒頭には作者略伝を、末尾には若干の考察を付す。

<sup>\*</sup> 但し、本稿に限り、作者がその像を剣闘士とは見做していないということもあり、カピトリニ美術館所蔵の像を意味する場合には、誤解を避けるために単に《像》とだけ記すことにする。

### キーワード

George Croly; The Dying German [Gladiator]; *Paris in 1815, Second Part*; Arminius; Hermann; Varus; Germanicus; The Battle of the Teutoburg Forest



図1 いわゆる《瀕死の剣闘士》 ローマ、カピトリニ美術館蔵

## 【1】作者略伝・本作品の執筆状況

ジョージ・クローリは、1780年、ダブリンで外科医の息子として生まれる。15歳でトリニティ・コレッジに入り、1804年に修士号を取得するとアイルランド聖公会の牧師に叙せられる。しかし、やがて聖職の道に見切りをつけ、1810年頃、母と二人の姉妹とともにロンドンに移り住み、1813年ころから『タイムズ』紙 (*The Times*) の劇評を担当するようになる。同年4月に同紙の海外特派員を命ぜられ、ハンブルクやパリに滞在する。この時の体験をもとに『1815年のパリ——詩』(*Paris in 1815. A Poem.*) を書き、英国に帰国した1817年にジョン・マリ社 (John Murray) より、匿名で出版する。

この作品は、フランス革命からナポレオン帝政までのパリの様子を、バイロンの『貴公子ハロルドの巡礼』第1~3巻 (*Childe Harold's Pilgrimage, Cantos I-III*) を思わせるような書きっぷりで、スペンサー連 (Spenserian stanza) も駆使しながら、種々の詩形で描いたものである。まず、パリ市内に点在するさまざまな歴史的建造物や記念碑などの描写で始まり、それらのなかで革命政府が行ったこと——特に暴徒と化した大衆が監獄に乱入し、囚人を殺害していくさま——などが、観察者の感想も交えて語られる、という詩である。

1821年、パリでの体験の第二弾を『1815年のパリ、第二部、ほか』(*Paris in 1815, With Other Poems, Second Part. By Rev. George Croly, A. M.*) として、ロンドンのジョン・ウォレン社 (John Warren) から出版する。冒頭には以下の「前書き」(Preface) が付されていた。ナポレオンが欧州各地から戦利品としてルーヴル宮に集めた美術品の数々の描写(「瀕死のゲルマン人」の詩行はここに含まれる)、ナポレオンのロシア遠征、ルイ十六世の処刑、ジョージ三世の崩御などが描かれている。つまり大雑把に言えば「第一部」が共和制フランスの興隆期とするなら、「第二部」はその衰退期を描いたものとなっている。(美術品の描写が、共和政体の衰退とどう結びつくかについては、本稿の最後に考察の対象とする。)

1820年から『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Magazine*) の執筆陣に加わり、以後36年間、詩や小説、エッセイや書評などを寄稿し続ける。『英国人名事典』(*Dictionary of National Biography*) の執筆者は、それによってクローリが極端な保守主義、反カトリック主義 (ultra-toryism, ultra-protestantism) を喧伝したと断じている。そうしたなかで『英国人名事典』執筆者が最高傑作として評価しているのが、1823年の小説『サラシール』(*Salathiel*) である。

## 【2】関連する史実の解説

クローリは、「瀕死のゲルマン人」の一節を解釈するうえで重要な点をいくつか、自註で解説している。まず、像のモデル。これはクローリ曰く、一般に考えられているように剣闘士ではなくゲルマン人である、と。本稿で、敢えて美術史における慣例である「瀕死の剣闘士」または「瀕死のガリア人」を採らずに、この一節を「瀕死のゲルマン人」と呼ぶのは、このためである。(但し、この像を表す時には、単に《像》と記す。) モデルの男については、18世紀中頃にヴィンケルマン (Johann Joachim Winckelmann, 1717-68) が

「伝令」説を唱えてから、諸説が出たようで、18世紀後半から19世紀初頭にかけては、「スパルタ人の喇叭吹き」(Carlo Fea, 1783-84)、「ガリア人もしくはゲルマン人の兵士」(Visconti, 1818-37)、「ガリア人」(Antonio Nibby, 1821) などがあったようで (Haskell & Penny 226)、クローリの「ゲルマン人」説もそうした流れの中で出たものである。とりわけ、ニッピイーの前掲文献は所謂《瀕死の剣闘士》像に特化した研究で、この出版が、「瀕死のゲルマン人」の一節を含む『1815年のパリ』の最初の出版と同じ1817年であるのは、この像のモデルに関して諸説の交錯する当時の状況を物語っているように思える。

次に典拠。クローリは、タキトゥス『年代記』(Tacitus, *The Annals*) 第1巻、第61節の冒頭部を原語で引用し、その記述が背景となっている史実であると述べている。以下に、『年代記』の他の箇所や、必要に応じて、タキトゥス以外の文献も適宜参照しつつ、本詩を鑑賞するうえで必要な事項を編年体風に簡潔に記述しよう。

AD 9: トイトブルクの森の戦い (the Battle of the Teutoburg Forest)。ライン川東部のトイトブルクの森で、ゲルマンのケルスキ族 (the Cherusci) の族長アルミニウス (ローマ名、Arminius, 18/17 BC - AD 19, 図2) 率いるゲルマン部族連合軍が、ローマ帝国のゲルマニア総督ヴァールス (Publius Quinctilius Varus, 46 BC - AD 9) 率いる三個軍団に奇襲をかけ、3日間に及ぶ戦いの末に全滅させ、ヴァールス自身を自害させた戦い。別名「ヘルマンの戦い」(Hermannsschlacht) または「ヴァールスの戦い」(Varusschlacht) として知られる。ゲルマンの視点からすれば、ローマ帝国の侵攻を食い止めたという点で、ゲルマン民族史に名高い戦いである。アルミニウスは、ゲルマン同盟結束のため、敗北したヴァールスの首級を、ローマに対しては中立の立場をとっていたマルコマンニ族 (Marcomanni) の族長マロボドゥウス (Maroboduus) のところへ送ったが、マロボドゥウスは、アルミニウスに与せず、それをローマに送り返した。(出典: パテルクルス『ローマ史要諦』(Paterculus, *Compendium of Roman History*) 第2巻、117-19章)



図2 Arminius

AD 15: ゲルマーニクスの侵攻。時のローマ皇帝ティベリウスの甥のゲルマーニクス (Germanicus Julius Caesar, 15 BC - AD 19) が、ゲルマニアでの反乱鎮圧のためにゲルマ

ニアへ侵攻。「トイトブルクの森の戦い」の跡で、散乱していた遺骨を収集し埋葬した。(クローリの自註に『年代記』第1巻とあるのは、遺骨収集を記述した第61節の冒頭部分。)その後、ゲルマーニクスはアルミニウスを追尾し、報復攻撃を試みるのだが、土地勘のあるゲルマン軍に攪乱されてしまう(第63節)。以後、タキトゥスでは「ゲルマニア戦役」の戦況がローマ軍に同情的な筆致で描かれ、最後にローマ軍の攻撃でゲルマニア軍が退散するが、アルミニウスは無傷のまま「戦場を捨てた」。(出典：タキトゥス『年代記』第1巻、第55-71節)

AD 21：アルミニウスの死。アルミニウスは、ゲルマン部族間の抗争の結果、近親者の手によって暗殺された。(出典：タキトゥス『年代記』第2巻、第88節)

### 【3】1821年版の原文

*Excerpts from George CROLY, Paris in 1815, Second Part (1821):--*

Cf. 'First Part' was published in 1817.

#### 【3-a】「まえがき」より *From PREFACE to the 1821 edition:*

A CONSIDERABLE number of the stanzas in this Poem were written in the year 1816, and intended to follow immediately upon the former part, which was published at that time. The causes of the delay must be unimportant to the reader, and the circumstance itself is mentioned only to avoid the appearance of plagiarism from works which have since appeared. The lines on the Louvre Statues, and Pictures, were written before the publication of the Canto of *Childe Harold*, in which the same subjects are described.

#### 【3-b】韻文

##### Paris in 1815, Second Part

LV

Beside him sinks a warrior on his shield,\*  
Whose history the heart alone must tell!  
Now, dim in eve--he looks, as on the field,  
Where when he fell, his country with him fell.  
Death sickens all his soul, the blood-drops steal  
Slow from his breast, congealing round the wound;  
His strong arm shakes, his chest has lost its swell,  
'Tis his last breath,--his eye-ball glares profound,  
His heavy forehead glooms, bends, plunges, to the ground!

LVI

Yet had he high revenge, if Roman tears  
For Roman slaughter could rejoice his soul.  
Did he not hear the crashing of the spears?  
When like a midnight tide, his warriors stole

Around the slumbering legions--till the roll  
Of the wild forest-drum awoke the glen;  
And all was havoc;--and the German pole  
Bore Varus' head o'er many a hill and fen.  
Chains and the spear are chaff, when Heaven gives hearts to men!

LVII

Had not that glance the fuller, haughtier joy,  
To see the Caesar stand a weeper there?  
Fated Germanicus! when, years gone by,  
The Legions came the funeral pile to rear;  
With silent march, bare head, and trailing spear,  
Piercing the forest o'er the slaughter grown;  
In horror finding chief and comrade dear  
In wolf-torn graves, and haggard piles of bone  
Along the ramparts' ruins, and marshy trenches strown.

LVIII

Still frown'd the fatal altars, now in robes  
Of giant weeds that sheeted down the boughs  
Of the brown pines. There had the thronging globes  
Of German warriors held the night's carouse,  
And groans of death, and Magic's fearful vows  
Startled the moon. But now the murder'd lay,  
The human hecatomb! in ghastly rows,  
The leaders still unmix'd with meaner clay  
Tribune and consul stretch'd in white and wild decay.

[ 3-c ] 作者自註より

“A Warrior on his Shield.”

“Collecting all his energies to die” is one of many striking conceptions in an Oxford prize-poem on the *Dying Gladiator*; but it scarcely conveys the expression of the statue. The Dying Gladiator is *collecting no energies*. His strength is totally gone, his eye looks blind, the flatness and flaccidness of muscle in the whole form, and the hollow distortion of the countenance, show that all power and mind are extinguished within him. His face and figure give the heavy sickness, and not the agony, of a mortal wound. There is no thinking in his features. His bulk is thrown for the moment on one giant arm; but in the next nothing can save it from giving way, or the head from rushing on its *crown* to the earth, or the man from being dead at the moment of its plunge.

This statue, of the highest excellence in its style of strong expression, is generally

supposed to represent, not a gladiator but a German dying on the field.

The allusions in the stanzas refer to the celebrated description of the march of the Roman army, to find the remains of Varus and his legions. “Igitur cupido Caesarem invadit solvendi supreme militibus,” &c.—*Tacitus, Annal. Lib. 1.*

## 【4】1821年版日本語訳

### 【4-a】まえがき

1821年版「前書き」より

この詩の大半は、1816年に執筆されたもので、当時[1817年]出版された「前半部」に引き続いて世に出るはずであった。その出版がなぜ遅れたかを述べるのは、差し控えておく。ただ、それ以後に出版された別の作品からの剽窃の疑いがかけられるのを避けるために説明しておく、ルーヴル宮の彫像や絵画に関する詩行は、同じ主題が扱われている『貴公子ハロルド』の当該巻の出版より前に書かれたのである。

### 【4-b】韻文

LV

その隣で身をかがめているのは、楯に乗った兵士。  
その話は、心だけに語らせておかねばならない。  
今、薄明の夕暮れ時、男の目は、戦場に向けられているかのようだ。  
男が斃れたまさにその時に、その故国も斃れたのだった。  
すでに死が魂にとりついている。血の滴りもゆっくりとなり、  
胸の傷口のあたりに凝まりかけている。  
力を入れた腕が痙攣し、胸がしおれる。  
最後の息だ。眼球の奥から怒気が放たれ、  
重くうつむいた額が闇に隠れ、崩れ、地面に倒れてゆく。

LVI

が、男は崇高なる復讐を果たしたのだ。もし、ローマ人が虐殺され、  
ローマ人が涙を流し、そのことで男の心が晴れるというならだが。  
男の耳には、白刃はくじんの相まみえる音が届かなかったのか？  
男の部下の兵士らが、夜半の上げ潮のように  
まどろむ大軍を囲んだ。やがて陣太鼓の  
響きが谷中を目覚ましたかと思う間もなく、  
敵味方入り乱れての会戦。ほどなくゲルマンの槍の頭に  
ウォルス将軍の首級が掲げられ、山を越え沼を越えていった。  
天が勇気を与え給うところ、鎖も槍も朧がらに等しい。

LVII

もし、その場でカエサルが泣き崩れているのを見たなら

あの眼に、さらに傲然とした喜びが光らなかつたらうか。  
呪われたゲルマニクスよ！ 何年もあと、  
戦死者を弔うべく使わされた軍団が、  
兜を脱ぎ、槍も構えず、厳かに行軍し、  
殺戮の地のうえに生い茂った森に分け入った時、  
かつての戦友や士官が、狼に食い千切られ、  
無残にも骨だけとなって、折れ重なるように  
崩れた土塁や、湿地の塹壕跡に横たわっているのを見、恐れ戦くのだ。

#### LVIII

生贄が屠られた祭壇は、今では陰鬱の気を放ち、  
褐色の松の枝から垂れ下がる茂った蔓草に  
覆われている。そこは、かつてゲルマンの兵士らが  
集い、夜の祝宴を張ったところ。  
隣からは、断末魔のうめき声、凄味を帯びた祈りの声が聞こえ、  
月を驚かせたものだった。が、今では、殺された人間が  
牛百頭の生贄さながらに、並べてある。  
士官の遺骨は、いまだ完全に土に帰すこともなく、  
一面、副官や隊長が野晒しとなっている。

#### 〔4-c〕自註

「楯に乗った兵士」

「力を振り絞って死んでゆく」というのは、《瀕死の剣闘士》をテーマにしたオックスフォード大学の懸賞詩にみられる傑出した着想の一つである。しかしながら、これでは、像の表情を伝えてはいない。瀕死の剣闘士は、「力を振り絞って」はいないからである。男の力は、完全に抜けていて、目は何も見ておらず、全身の筋肉はだらりと弛緩し、顔の表情は虚ろに歪んでいて、全ての力も思考も失せていることは明らかである。表情や姿勢からは、致命傷を受けて衰弱した様子がかがえるのであって、苦痛を感じているのではない。思考が停止しているのが、表情から読み取れる。今この瞬間、全身の体重が片方の腕で支えられているのだが、次の瞬間には、腕が崩れ落ちるかもしれないし、頭部が地面に落ちてゆくかもしれない。死のなかに落ち込んでゆくその直前の瞬間なのである。

表情の強烈さにおいて最高の様式をそなえたこの像は、実は剣闘士ではなく、戦場で息絶えてゆくゲルマン人を表したものと一般に考えられている。

これらの連で言及されているのは、ローマがウァールスとその軍団の遺骨を収集するために送った行軍の描写である。(タキトゥス『年代記』第1巻)

#### 〔5〕1821年版語釈・訳註

##### 〔5-a〕まえがき

詩の題 (Second Part) : この1817年版の *Paris in 1815* のタイトルページおよび書出しの

部分には「第一部」(First Part) という記載はなく、詩の最後に ‘The End of the First Part’ と記されている。このなかに問題の剣闘士 [瀕死のゲルマン人] の詩行は含まれていない。よって Byron の *Childe Harold's Pilgrimage*, Canto IV (comp., 1817, pub., 1818) が Croly の影響を受けていると主張した Samuel C. Chew の説 (*Modern Language Notes*, XXVIII (1913), 201-03) は誤りである。というより、あり得ない説である。恐らく Chew は、1830年刊行の2巻本の全詩集 (*The Poetical Works of the Rev. George Croly*. London: Henry Colburn & Richard Bentley) に採録された1821年出版のSecond Partを根拠に先の主張をしたと思われるが、もし1817年版と1821年版の版本に、それぞれ別個に当たっていさえすれば、以下に引用する「まえがき」も発見したであろうから、こうした誤りは十分に防ぎ得たはずである。同様に Stephen A. Larrabee, *English Bards and Grecian Marbles: The Relationship between Sculpture and Poetry Especially in the Romantic Period* (Port Washington, N. Y.: Kennikat Pr., 1964), p. 259の記述も、原典を確認せずに Chew を鵜呑みにした結果生じたものと推測していただろう。

## 【5-b】韻文

LV

この連は、《像》がアルミニウスが死ぬ場面を描いたものとして、クローリが想像して書いたもの。アルミニウスの死に関する言及は、タキトゥス『年代記』2巻88節にあるが、死ぬ場面の具体的描写はない。現存する「トイトブルクの森の戦い」に関する文献はすべてローマの歴史家 (Strabon, Paterculus, Tacitus, Sueton, Florus, Cassius Dio) の筆によるもので、ゲルマンの視点から語られたものは皆無である。\* そうした状況をふまえて、これらの連 (第55-58連) を、アルミニウスの心が語った内容 (または the heart を tell の間接目的語と解せば、語り手が、アルミニウスの心に語りかけた内容) とすることで、ゲルマンに同情し、瀕死のゲルマン人の崇高さを《像》の崇高な表情と重ね合わせたもの。これが第55-58連のテーマ。

1 him : 前の連で描写されているラオコーン像のこと。

warrior : 第一義としては《像》のモデルの男のこと。この語からドイツ語の「武人」(Heer man) を思い起こせば、Hermann ⇒ Arminius と辿るのは、容易なことである。

2 the heart : 前行 warrior の心と解す。

4 : この行だけ見ると、he は Varus を指していると考えたくなるが、この he が1行目の warrior を指していることは間違えなく、だとすれば註から考えて《像》が表している German であり、だとすれば Arminius と解することしかできない。

5-9 : 《像》の写実的な描写。

\* “Ancient Authors on the Issue of the Varus Battle” in *Varusschlacht im Osnabrucker Land: Museum und Park Kalkriese*.

<http://www.kalkriese-varusschlacht.de/>

LVI

3-7 : AD 9 のアルミニウスの奇襲の様を、クローリが想像したものか？

7-9 : 敗北したウァールスの首級が、ゲルマンの他の部族であるマルコマンニ族 (Marco-

manni) の族長マロボドゥウス (Maroboduus) のところへ送られたという逸話は、ウェッ  
レイウス・パテルクルス『ローマ史要諦』第2巻、119章に次のように記されている——  
The body of Varus, partially burned, was mangled by the enemy in their barbarity; his  
head was cut off and taken to Maroboduus and was sent by him to Caesar; but in spite  
of the disaster it was honoured by burial in the tomb of his family. (Paterculus)

## LVII

2 the Caesar : 厳密にはGermanicusは皇帝 (Caesar) ではないが、この文脈では、次行の  
Germanicus とするのがよい。因みに、『年代記』第1巻、第62節においても、タキトゥス  
は、GermanicusのことをCaesarと呼んでいる。Primum exstruendo tumulo caespitem  
Caesar posuit, gratissimo munere in defunctos et praesentibus doloris socius. (At the  
erection of the funeral mound the Caesar laid the first sod, paying a dear tribute to the  
departed, and associating himself with the grief of those around him.)

但しSuetoniusに拠ると、Varusが殺され、三個師団が全滅した報を聞いた時の皇帝 Au-  
gustusは、「ウァールスよ、我が軍団を返せ (Quintili Vare, legions redde! (Quintilius  
Varus, give me back my legions!))」と叫んだとされている (Suetonius) ことから、  
CrolyがSuetoniusを読んでいたら、Augustusを意図してthe Caesarと言ったと解釈  
することも不可能ではない。

3 Germanicus : トイトブルクの森の戦いで敗北に対する報復として、時のローマ皇帝  
Tiberiusが、甥のGermanicusに、AD14~16年にかけて、ゲルマニアに攻撃をさせた。

5 trail : (OED) 2. Mil. orig. To carry (a pike, etc.) in a right hand in an oblique position  
with the head forward and the butt nearly touching the ground; later spec. to carry a  
lance or a rifle in a horizontal position in the right hand with the arm fully extended  
downward.

5 With silent march, bare head, and trailing spear : 攻撃態勢をとらずに行軍してゆく様子。

8-9 : bones...the rampart's ruins...marshy trenches: 『年代記』第1巻、第61節と酷似。  
Cf. Tacitus, *Annals*, Bk. 1, 61: ...then a half-ruined wall and shallow ditch showed that  
there the now broken remnant had taken cover. In the plain between were bleaching  
bones, scattered or in little heaps, as the men had fallen, fleeing or standing fast.

## LVIII

1-9 ...altars...hecatomb...Tribune and consul : 士官級の敵を生贄として祭壇にささげたこ  
とは、『年代記』第1巻、第61節と酷似。Cf. Tacitus, *Annals*, Bk. 1, 61: In the neigh-  
bouring groves stood the savage altars at which they had slaughtered the tribunes  
and chief centurions.

3-4 : 次の記述との類似が見られる。Tacitus, *Annals*, Bk. 1, 65: ...The barbarians, in high  
carousal, filled the low-lying valleys and echoing woods with chants of triumph or  
fierce vociferations.... 但しこれは、AD15年にゲルマーニクスがアルミニウスに仕掛けた  
攻撃の時の記述。

9 tribune : 国原の訳に従い「副官」とした。

【5-c】自註

An Oxford prize-poem on the *Dying Gladiator*: 1810年のオックスフォード大学の学部学生対象の文学賞であるニューディゲット賞 (Newdigate Prize) の受賞作品 Robert Chinery, *The Statue of the Dying Gladiator* をさしているものと思われるが、Croly の引用は正確ではない。正しくは次の通り——He will not sink, but plunge into the grave, / Exhaust his mighty heart in one last sigh, / And rally life's whole energy - to die! (16-18) 原文で、expression (表現) という語を用いずに、conception (着想) と言っているのは、Croly 自身、正確な引用でないことを承知していたからと推測される。

【6】1830年版原文

*From George CROLY, Paris in 1815, Second Part (1830) :-*

【6-a】まえがき

【1821年版と同じ】

【6-b】韻文

LI

Beside him sinks a warrior on his shield,  
Whose history the heart alone must tell!  
Now, dim in eve--he looks, as on the field,  
Where when he fell, his country with him fell.  
Death sickens all his soul, the blood-drops steal  
Slow from his breast, congealing round the wound;  
His strong arm shakes, his chest has lost its swell,  
'Tis his last breath,--his eye-ball glares profound,  
His heavy forehead glooms, bends, plunges, to the ground!

LII

Yet had the bold barbarian joy; if tears  
For Roman slaughter could rejoice his soul.  
Did he not hear the crashing of the spears?  
When like a midnight tide, his warriors stole  
Around the slumb'ring legions--till the roll  
Of the wild forest-drum awoke the glen;  
And every blow let loose a Roman soul.  
So let them sting the lion in his den;  
Chains and the spear are chaff, when Heaven gives hearts to men!

LIII

Had not that with'ring lip quaff'd long and deep,

The cup that vengeance for the patriot fills;  
When swords instinctive from their scabbards leap,  
When the dim forests, and the mighty hills,  
And the lone gushings of the mountain rills,  
All utter to the soul a cry of shame;  
And shame, like drops of molten brass, distils  
On the bare head and bosom of the tame,  
Till the whole fetter'd man, heart, blood, and brain, is flame.

LIV

Then there were lightnings in that clouded eye,  
And sounds of triumph in that heavy ear;  
Aye, and that icy limb was bounding nigh,  
Tracking the Roman with the bow and spear,  
As through the live-long night the death-march drear  
Pierced the deep forests o'er the slaughter grown;  
Seeking for ancient chief and comrade dear,  
Through wolf-torn graves and haggard piles of bone,  
Along the rampart ruins, and marshy trenches strown.

LV

And what they sought they found, in wild-weed robes,  
Laid in the sepulchres that thunder ploughs.  
They found the circle, where the thronging globes  
Of German warriors held the night's carouse,  
And groans of death, and Magic's fearful vows  
Startled the moon. Around the altars lay  
The human hecatomb! in ghastly rows,  
The leaders still unmix'd with meaner clay,  
Tribune and consul stretch'd in white and wild decay.

**[ 6-c ] 自註**

【1821年版と同じ】

**[ 7 ] 1830年版日本語訳**

**[ 7-a ] まえがき**

【1821年版と同じ】

〔7-b〕韻文

LI

その隣で身をかがめているのは、楯に乗った兵士。  
その話は、心だけに語らせておかねばならない。  
今、薄明の夕暮れ時、男の目は、戦場に向けられているかのよう。  
男が斃れたまさにその時に、その故国も斃れたのだった。  
すでに死が魂にとりついている。血の滴りもゆっくりとなり、  
胸の傷口のあたりに凝まりかけている。  
力を入れた腕が痙攣し、胸がしおれる。  
最後の息だ。眼球の奥から怒気が放たれ、  
重くうつむいた額が闇に隠れ、崩れ、地面に倒れてゆく。

LII

が、その勇猛なる蛮族の男は喜びを味わったのだ。もしローマ人が  
虐殺され、ローマ人が涙を流し、そのことで男の心が晴れるというならだが。  
男の耳には、白刃の相まみえる音が届かなかったのか？  
男の部下の兵士らが、夜半の上げ潮のように  
まどろむ大軍を囲んだ。やがて陣太鼓の  
響きが谷中を目覚ましたかと思う間もなく、  
剣が一振り振り下ろされるたびに、一人のローマ人の魂が解き放たれていったのだ。  
穴に追われた獅子よ、刺されるがよい。  
天が勇気を与え給うところ、鎖も槍も朧がらに等しいのだ。

LIII

皺の走った口元、あの口で、《復讐》が愛国者のために満たした盃を  
心ゆくまで飲み干さなかったのだろうか——  
剣が本能のように鞘から抜け出た時、  
ほの暗い森も、大いなる山も、  
谷川の孤独な水音も——  
全てが恥辱の叫び声を、男の魂に対して、投げかけていた、あの時。  
その恥辱の思いは、まるで溶けた真鍮の滴りのように、従順な者の  
頭のなかで、そして胸のなかで、純化されてゆき、  
ついに、この枷をはめられた男から——心も、血も、頭も——全身から炎が立ち上ったの  
だった。

LIV

その後、あの曇った目に稲妻が走り、  
あの鈍い耳に勝利の雄叫びが聞こえた。  
そうだ、あの氷のような足で跳ね回り、すぐそばまで  
弓と槍を手にして、ローマ人を追い詰めていったのだ。

一方、彼らは決死の徹夜の行軍で、  
殺戮の地のうえに生い茂った森に分け入り、  
かつての戦友や士官が、狼に食い千切られ、  
無残にも骨だけとなって、折れ重なるように  
崩れた土塁や、湿地の塹壕跡に横たわっているのを見、恐れ戦くのだ。

LV

ついに彼らは、探していたものを見つけた。蔓草に覆われた  
墓所を、時折、稲妻が掘り起こしていた。  
円卓の跡も見つけた。そこはかつてゲルマンの兵士らが  
車座に集い、夜の祝宴を張ったところ。  
隣からは、断末魔のうめき声、凄味を帯びた祈りの声が聞こえ、  
月を驚かせたものだった。が、今では、祭壇の周りに  
殺された人間が牛百頭の生贄さながらに、並べてある。  
士官の遺骨は、いまだ完全に土に帰すこともなく、  
一面、副官や隊長が野晒しとなっている。

〔7-c〕自註

【1821年版と同じ】

〔8〕1830年版語釈・訳註（1821年版と異なる語句に限る）

〔8-a〕まえがき

【1821年版と同じ】

〔8-b〕韻文

LI

【1821年版LV連と同じ】

LII

- 1 the bold barbarian：アルミニウスのこと。  
7 let loose a ... soul：「魂を〔肉体から〕解き放つ」＝「殺す」  
8 the lion in his den：この文脈でlionとはウァールスのこと。

LIII

この連、当初はローマ帝国の支配に従順だったアルミニウスが、その支配に恥辱を感じるようになり、やがてウァールスに攻撃をしかけるに至った心の動きをたどっている。だから、lip (1), soul (6), head (8), bosom (8) はいずれもアルミニウスのもの、the tame (8), the whole fetter'd man (9) はアルミニウス自身を指す。

1 that with'ring lip：アルミニウスの口元を意味しているのだが、第一義的には《像》の

口元に皺が走っているように見えることを指す。(上唇部の皺のように見えるものは、筆者には口髭と思われる。) 図3参照。

2 The cup that vengeance for the patriot fills: The cup は、前行 quaff'd の目的語。Vengeance は fills の主語で擬人化されている。「《復讐》が愛国者に対して満たしたところの盃」の意。

6 utter : 動詞で、主語は forests; hills; gushings。

LIII - LIV : LIII連全部と、次のLIV連前半は、1821年版にはなく、1830年版で新たに加筆された部分。すでに1821年版では「《像》=アルミニウス」という等式が成立し、《像》の崇高さがアルミニウスに付与されていたが、1830年版になると、ローマ帝国の支配を甘んじて受けていたゲルマン人アルミニウスの心のなかで恥辱の念が純化されていって、ついに周囲の自然がアルミニウスの魂に対して、恥辱の念を叫びかけるに及んで、全身に炎が燃え立ち、アルミニウスが本能的に剣を抜き、ウァールスの軍団に攻撃をしかけた、という心の動きが描かれている。



図3 いわゆる《瀕死の剣闘士》部分 Cf. 'that with'ring lip'(LIII)

#### LIV

1-4 : この連の前半部 (1-4) は、AD15年にゲルマーニクスがウァールスらの遺骨を収集に来たとき、ローマ軍をアルミニウスが攪乱したさまの描写 (タキトゥス『年代記』第1巻、第63節) である、と解す。そもそも、この『年代記』第1巻、第63節は、ゲルマーニクスがアルミニウスに報復攻撃を試みたが、地の利を得ていたアルミニウスによって、目的の達成を阻まれたということが、『年代記』の他の箇所と同様に、ローマ側に同情的な視点から書かれているのだが、クローリは焦点をアルミニウスに移し、ゲルマン側の視点から書いている。

1 that clouded eye : アルミニウスの目のことだが、第一義的には《像》の目が虚ろなさまを表す。作者自註に "...his eye looks blind..." とある。図3参照。

4 the Roman : Germanicus と解す。

5 As : 文法的には、時の同時性を表すが、あまり厳密に考えない方がよい。連の後半部 (5-9) から次の連 (LV) にかけては、ゲルマーニクスがおこなったウァールスらの遺骨

収集の記述で、基本的に1821年版と同じ内容。それは『年代記』第1巻、第61-62節と符合していて、『年代記』によれば、アルミニウスによるローマ軍の攪乱の記述の前に起きたことになっているので。

LV

2 the sepulchres that thunder ploughs : 稲妻が地面に落ち、地中深くにまで達し、あたかも墓所を「耕して」いるかのように見えることから。

### 〔8-c〕 自註

【1821年版と同じ】

## 〔9〕 考察

### 〔9-a〕 テーマ

現存する「トイトブルクの森の戦い」に関する文献はすべてローマの歴史家（Strabon, Paternullus, Tacitus, Sueton, Florus, Cassius Dio）の筆によるもので、ゲルマンの視点から語られたものはない。<sup>\*</sup> そうした状況をふまえて、「瀕死のゲルマン人」の詩行を、アルミニウスの心が語った内容（またはthe heartをtellの間接目的語と解せば、語り手が、アルミニウスの心に語りかけた内容）とすることで、ゲルマンに同情的な立場から、瀕死のゲルマン人の崇高さを《像》の崇高な表情と重ね合わせたのが、「瀕死のゲルマン人」の詩行のテーマと考えられる。

<sup>\*</sup> “Ancient Authors on the Issue of the Varus Battle” in *Varusschlacht im Osnabrucker Land: Museum und Park Kalkriese*.

<http://www.kalkriese-varusschlacht.de/>

### 〔9-b〕 1821年版と1830年版の比較

1821年版と1830年版を比較すると、面白い現象に気づく。固有名詞の消滅である。1821年版にはローマ側のVarus, Germanicusという人名あったが、1830年版ではそれらが消滅する。1830年版にある固有名詞は、GermanとRomanだけになる。このことの意味は、重要である。全ての対立構造が、個人のレベルを超えてGerman対Romanという民族のレベルに純化され、収斂していったということを意味しているからである。

次に1830年版で新たに加わった部分を見てみよう。LIII-LIV連にかけての十数行で重要なことは、従順なアルミニウスの心のなかで恥辱の念が純化されていった契機となったのが、自然との交流と通してだという点である。しかも、単に、森や山や川の音のなかに～を聴いた、という表現をとらずに、森や山や川の方が、[アルミニウスの]「魂に対して、語りかける」という表現になっている点が面白い。つまり、自然が能動的にアルミニウスの魂に働きかけているのだ。そしてその結果、目に「稲光が光り」、足が「跳躍する」ことになる、言葉を変えて言えば、アルミニウス自身が自然の一部になるのである。このアルミニウスの自然化によって、文明の象徴たるローマと、自然の象徴たるゲルマンという対立構造が一層際立ってくる。

### 〔9-c〕 作品中に「アルミニウス」の名がないのは何故か？

そもそも、Arminiusというのは、ラテン系の名前である。ゲルマン人を讃えるのに、ラテン系の名前がふさわしくないのは、言うまでもない。ただ、現存する「トイトブルクの森の戦い」に関する文献はすべてローマの歴史家（Strabon, Paterculus, Tacitus, Sueton, Florus, Cassius Dio）の筆によるもので、彼らは皆、Arminiusという呼称を用いている。古典期の歴史家で、これ以外の名前を用いている者はいない。個人名を消滅させた1830年版ならいざ知らず、Varus, Germanicusという人名を用いている1821年版でさえArminiusという固有名詞が用いられなかった理由の一つは、ラテン系の名を用いることへの強い抵抗感があったであろうことは、十分に推測できる。

### 〔9-c-i〕 「アルメニウス」から「ヘルマン」へ —— ドイツ民族主義の興隆

ルネサンス期、いわゆる暗黒時代の中世のあいだ埋もれていた多くの古典古代の文献が再発見される。タキトゥスも例外ではない。その写本の存在が知られるようになるのが1420年代。その後、1455年に時のピッコロミーニ枢機卿（Cardinal Aeneas Silvius Piccolomini、後の教皇ピウス二世）によりその存在が確認される。非常に面白いことに、当初からタキトゥスは、ローマ対ゲルマンという文脈のなかで政治的に利用されていた。ベナリオによると、ゲルマンの一地方のマインツの司教が、重税の軽減を嘆願する書簡を1457年にローマ宛てに書いたのだが、その返書に、ピッコロミーニ枢機卿が、タキトゥスを引用しつつ答えて「ゲルマンの諸部族を野蛮な状態から現在のように文明化したのは、教会である」旨、述べたということである。（Benario 83-84）

その後、紆余曲折を経て、1515年に『年代記』1～6巻が活版印刷により出版され、直後の1519年または1520年にドイツ宗教改革の立役者フォン・フッテン（Ulrich von Hutten）が『アルミニウス』（*Arminius*）なる書を著し、宗教改革の聖地ヴィッテンベルクで1538年と1557年に出版されることになる。

AruminiusをHermannと呼んだのがルター（Martin Luther, 1483-1546）だということとはよく知られているが\*、ベナリオによると、「武人」（Heer man）との語呂合わせもあったようである。（Benario 87）いずれにしても、ローマ教会に対抗するプロテスタントとして、極めて政治的ポーズであることは間違いない。再度ベナリオの説を引用すれば、「これ以後、ヘルマンという古代の英雄像が、ドイツの国民意識の形成に多大な役割を演じることになる」（Benario 88）のである。

\*Cf. ‘The Myth Arminius – Hermann’

ベナリオによると、1676年から1910年の間に上演されたアルミニウス＝ヘルマン関連のオペラは75編におよぶそうだが（Benario 89）、そのなかの嚆矢ともいえるべきは、ヘンデル（Georg Friedrich Händel, 1685-1759）のイタリア語のオペラ『アルミニオ』（*Arminio*）（初演1731年、ロンドン）だろう。18世紀後半で特筆すべきは、クロップシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock, 1724-1803）の「ヘルマン三部作」だろう。『ヘルマンの戦い』（*Hermans Schlacht*, 1769）、『ヘルマンと侯爵』（*Hermann und die Fürsten*, 1784）、『ヘルマンの死』（*Hermanns Tod*, 1787）で、カールソンによれば、対立する国家との対立軸のうえでゲルマンの国民意識を高めようとした作品である（Carlson 140）。

以後、歴史上、ドイツの国民意識が昂揚に向かった時、またはラテン文化と対抗しよう

とした時に、しばしば、ヘルマン (=アルミニウス) がゲルマンの象徴として登場することになる。

### 【9-c-ii】ナポレオン帝政期のヘルマン=アルミニウス

1808年ナポレオン占領下のドイツで、反ナポレオンの意図をもって書かれた演劇がある。フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) の『ヘルマンの戦い』(*Die Hermannsschlacht*) である (Mathieu 1-10)。しかし、翌1809年オーストリアがフランスに宣戦布告すると、フォン・クライストはウィーンの興行主宛てに「今、この時にこそ上演してもらおう意図して」書いた旨を督促するのだが、結局、直後のヴァーグラムの戦いにナポレオンが勝利したため、1821まで出版もされず、1860年まで上演もされることがなかった。(Carlson 143)

ここで、再度、1821年に初めて出版された『1815年のパリ、第二部、ほか』における「瀕死のゲルマン人」の詩行の意味について考えてみよう。すでに述べたように、大雑把に言えば1817年出版の「第一部」が共和制フランスの興隆期で、1821年の「第二部」はその衰退期を描いたものとなっている。「第二部」にある、ナポレオンが欧州各地から戦利品としてルーヴル宮に集めた美術品の数々描写は、一見すると必ずしも共和政体の衰退期と直接に結びつくものではないかもしれないが、「瀕死のゲルマン人」の詩行に関して言うなら、戦利品として集められた美術品が、ナポレオンや共和政フランスを讃えるどころか、皮肉にも、ゲルマン人およびゲルマン文化の崇高さを讃えているのは、フランス文化の敗北に他ならない。

クローリの「瀕死のゲルマン人」も、これまで、アルミニウス=ヘルマンが、フランス文化に対立するところのドイツ文化、ラテン文化に対立するところのゲルマン文化の象徴としてしばしば用いられてきたのと同じ文脈で、アルミニウス=ヘルマンを位置づけ、利用しているのである。

先にクローリは Arminius というラテン系の名前を用いることに抵抗感があったのではないかと述べたが、本項で述べたゲルマン系の Hermann という名を用いることもしていないというのも事実である。但し、最初の連の冒頭部に warrior とあるのに注意したい。この warrior という語からドイツ語の「武人」(Heer man) という語を思い起こすなら、Hermann ⇒ Arminius と辿るのは、さほど難しいことではない。想像をたくましくすると、クローリは、Arminius という語は用いずに、Hermann を warrior のなかに忍ばせていたのかも知れない。

それにしても、クローリもフォン・クライストも、どちらも1821年の出版——しかも、両者とも、それ以前の執筆でありながら、何らかの理由で出版が遅れての1821年の出版である。(もっとも、フォン・クライストはナポレオン全盛期の執筆で、クローリはナポレオン敗北後の執筆という違いはある。) これは偶然か、または何らかの時代的必然性があるのか、ことによると1821年5月5日のナポレオンの死に関係があるのか否か、この点を今後のさらなる課題として残しておきたい。

### 【9-c-iii】エピローグ — ヘルマン=アルミニウスのその後

ナポレオン戦争による神聖ローマ帝国の崩壊で統一を欠いていたドイツも、1866年の普

壘戦争と、1870-71年の普仏戦争を経て、ドイツ帝国初代宰相ビスマルク（Otto Eduard Leopold Bismarck-Schönhausen, 1815-98）のもとで統一へ向かうことになる。我々の文脈では、そのビスマルク時代最大の出来事が、トイトブルクの森の戦いが行われたとされていたデトモルト（Detmold）近郊に1875年「ヘルマン記念碑」(Hermannsdenkmal, 図4)が建造されたことであろう。言うまでもなく、普仏戦争に勝利して南北ドイツの統一を果たした国民感情を象徴するにふさわしい記念碑である。



図4 Hermannsdenkmal

ナチスドイツ時代のヘルマンについては、筆者の調べた範囲では、不思議なことに、具体的言及に乏しい。歴史家ケステルスの言を借りるなら、「タキトゥスによって証明された民族の純粋性が破壊的目的に利用された」からなのかも知れない（Kösters）。しかし、20世紀後半になっても、この「ヘルマン記念碑」を訪れる「巡礼者」が後を絶たないのも事実で、それは、ラケールの言うように、「国民意識の探究と関係があるに違いない」（Laqueur 144）のかも知れないし、ベナリオの言う「祖国の再発見」<sup>ハイマート</sup>（Benario 92）の行為なのかも知れない。

ベルリンの壁崩壊を直前に控えた1987年、オスナブリュック（Osnabrück）近郊のカルクリーゼ（Kalkrise, 図5）で、貨幣や武器などのローマ時代の遺物が出土し、つづく本格的な考古学的調査の結果、そこがタキトゥスが『年代記』で述べているアルミニウスによるウェールス軍襲撃の地である可能性が極めて高いことが判明した。デトモルトから70キロほど離れた地点である。2003年にはそこに記念博物館が開館し、ローマ軍、ゲルマン軍の会戦の様相も再現されている。

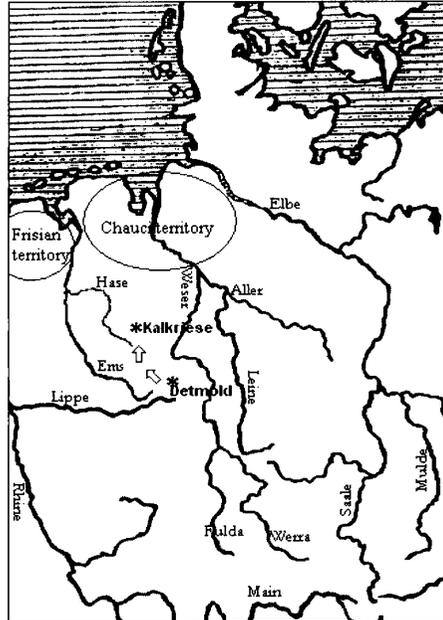


図5 カルクリーゼ (MagShamhráin 129)

参考文献

- ‘Ancient Authors on the Issue of the Varus Battle’ in *Varusschlacht im Osnabrucker Land: Museum und Park Kalkriese*.  
<http://www.kalkriese-varusschlacht.de/>
- Baretti, Joseph. *A Guide through the Royal Academy*. London, 1781.
- Baumarchais, Pierre-Augustin Caron de. *A Sentimental Journey through Greece, in a Series of Letters Written from Constantinople...by M de Guys ... Translated from French*. Dublin, 1773.
- Benario, Herbert W. ‘Arminius into Hermann: History into Legend’, *Greece & Rome*, Vol. 51, No. 1 (April 2004), pp. 83-94.
- Carlson, Marvin. ‘Nationalism and the Romantic Drama in Europe’, Gerald Gillespie, ed., *Romantic Drama* (Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 1994), pp. 139-52.
- Chinnery, Robert. *The Statue of the Dying Gladiator: A Prize Poem, Recited in the Theatre, Oxford July 3*. Oxford, 1810. なお、2013年12月24日現在Internet Archive (<http://www.archive.org/>)でこの作品を検索してヒットするものは、全く別の作品である。
- [Croly, George.] *Paris in 1815: A Poem*. London: John Murray, 1817.
- Croly, George. *Paris in 1815, with Other Poems*. London: J. Warren, 1821.
- Croly, George. *The Poetical Works*. 2 vols. London: H. Colburn & R. Bentley, 1830.
- Croly, George. *Paris in 1815; Lines on the Death of ...Princess Charlotte; The Angel of the World; Paris in 1815, Second Part; Catiline; Gems (drawn by Richard Dagley)*. Introduction for the Garland edition by Donald H. Reiman. New York & London: Garland, 1977.
- Dictionary of National Biography*.
- Gillespie, Gerald, ed. *Romantic Drama*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins, 1994.
- Haskell, Francis and Nicholas Penny. *Taste and the Antique*. New Haven, 1981.
- Hayley, William. *An Essay on Sculpture, in a Series of Epistles to John Flaxman*. London, 1800.
- Kasahara Yorimichi 笠原順路「英詩註解：ロマン主義時代の剣闘士詩 (1)——William Hayley, Robert Chinnery」明星大学教育学部紀要、第1号 (2011)、pp. 179-86.

- . 「ロマン主義時代の剣闘士詩における写実と藝術の相克——ヘマンズ『瀕死の剣闘士像』註解」、新見肇子・鈴木雅之共編著『揺るぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』(2012)、pp. 47-66.
- . 「英詩註解——William SOTHEBYの剣闘士」 明星大学教育学部紀要、第3号 (2013)、pp. 71-86.
- Kleist, Heinrich von. *The Battle of Herrmann: A Drama*. Tr. by Rachel MagShamhráin. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008.
- Knight, Richard Payne. *An Analytical Inquiry into the Principles of Taste*. London, 1805.
- Kösters, Klaus. 'The Misappropriated Germanic Leader' in *The Atlantic Times*, May 2009.
- Laqueur, Walter. 'Arminius or Patriotism Rediscovered', in *Germany Today: A Personal Report* (1985).
- Lendering, Jona. 'The Battle in the Teutoburg Forest' in *Livius: Articles on Ancient History*. <http://www.livius.org/>
- Mathieu, G. 'Kleist's Hermann: The Portrait of an Artist in Propaganda', *German Life and Letters*, Vol. 7, No. 1 (Oct. 1953), pp. 1-10.
- 'The Myth Arminius - Hermann' in *Varusschlacht im Osnabrucker Land: Museum und Park Kalkriese*. <http://www.kalkriese-varusschlacht.de/>
- Paterculus, Velleius. *Compendium of Roman History / Res Gestae Divi Augusti*, tr. by Frederick W. Shipley. Cambridge, MA; London: Harvard U P, 1924.
- Ramsay, Rev. James. *Essay on the Treatment and Conversion of African Slaves in the British Colonies*. Dublin, 1784.
- Richardson, Jonathan. *An Account of Some of the Statues, Bas-reliefs, Drawings and Pictures, in Italy, etc. with Remarks*. London, 1722.
- Schuter, W. 'The Battle of the Teutoburg Forest: Archeological Research at Kalkrise near Osnabruck', in J. D. Creighton and R. J. A. Wilson, eds., *Roman Germany: Studies in Cultural Interaction, JRA Supplementary Series 32* (1999), pp. 125ff.
- Suetonius*, 2 vols. Tr. By J. C. Rolfe. Cambridge, Mass.: Harvard U P; London: Heinemann, 1951-59. Loeb Library.
- Tacitus. *The Histories, IV-V & The Annals, I-III. The Annals*, tr. by John Jackson. Cambridge, Mass.: Harvard U P; London: Heinemann, 1931. Loeb Library.
- . 『タキトゥス』、国原吉之助訳、東京：筑摩書房、昭和40 [1965]年。世界古典文学全集、第22巻。
- Winckelmann, Johann Joachim. *Reflection on the Paintings and Sculpture of the Greeks*. tr. Fusseli [sic.]. 2 ed., 1767.